

選考委員の一人だった北方謙三さんが、編集者たちと一緒に会場に慌ただしく入ってきて、ちょうど入口隅のところにいた僕の肩を叩いた。「後で、俺のところに来い。話をしよう」

実際に話をしてくれた。「とにかくたくさん書け。何千枚も書け」「踏んづけられて、批判されても書け」「もっとシンプルな話がきつといい」

おそらく若い小説書きがいたら北方さんはいつもこんな風に励ますのだろう。明日になったら僕のことなど忘れているだろう。そう思いながらも救われた気分だった。

いや、それ以外にも会場では編集者の方や付き添いの方に温かい言葉をいただき、励まされた。ただ、やはりあの時の北方さんの「俺のところに来い」がなければ、僕はまた小説を書こうとはしなかったはずだ。

結局、僕は小説を書きつづけ、幸いなことに最近本を一冊出版していただくことができたが、そうでなくとも小説を書く喜びを失わずに済み、今も次の小説を書いている。

会社

も辞めていて、ほかに行く場所もなく、エッセイのネタを拾う場所といえば、喫茶店でした。専業作家になったばかりで、正直、毎日不安だった頃です。

十年ほど前、関東の田舎町から仙台へやってきた僕の前には、「いずい」という未知なる言葉が、立ちふさがりました。

「その『いずい』ってどういう意味なの?」「『いずい』とは『いずい』としか言いようのない感覚なんだよ」「みんなが知っている言葉で言ってくれよ」「『いずい』は、みんなが知ってるんだって」

説明を求めても、このように意地悪としか思えない言葉が返ってくるばかりで、はじめのうちはかなり困惑したのを覚えています。ああ、なるほど、不気味な暗号で僕を戸惑わせ、追い返そうとしているんだな、と不安になったくらいです。

仕方がなくて、その言葉の使われる場面や文脈をじっくり観察しました。今では、「たぶん、しっくりこない、という意味なのかな」と見当をつけ、僕自身も頻繁に使うようになっていますが、もし今、よそからやってきた誰かが意味を訊ねてきたら、僕は笑いをこらえ、とても残念そうに、「これは『いずい』としか言いようがないのですよ」と説明してやろうと思っています。

先日、あるミュージシャンの方にお会いして、話をする機会があったのですが、その時に彼がこう言っていたのが非常に印象的でした。「映画は、映像が嘘っぽいと白けちゃうんだけど、小説だと自分で想像するから、何でもできるよね」

また、とある作家さんは、「映像にできるならしてみろ、というくらいの気持ちで書いています」と言っていました。

とある作家：本多孝好

先日、不快な電話がかかってきました。やけに馴れ馴れしい若い男性の声で、「賃貸マンションにお住まいの方に、お得な話をしているのですが」と早口で言ってきたのです。正直なところ僕は、「書いている小説を面白くする劇的なアイディア」ならまだしも、「お得な話」にはあまり興味がありませんでした。「関心がないので」と電話を切ろうとしたのですが、すると相手は、「関心がない？！」と急に声を荒らげました。信じられない、という口調です。「大切な住まいについて、関心がないのですか？」と。

仕方がないので、「時間がないんです」と断わろうとすると今度は、「時間がない？！」とまた語調を強め、「ではいつならよろしいですか？」ときました。

「そういう時間の問題ではなくて、とにかく、電話されても困るんです」

「ということは、先ほどの、時間がない、というのは嘘だったんですね」

こういう場合、向こうには、こう来たらこう返事をする、というマニュアルがあるのでしょうか。相手の言葉に矛盾があれば、それを責めるのも作戦なのでしょう。

ためしに、「ところで、会社の名前は何と言うのですか」と訊ねると、意外にもあっさりと答えてくれました。「あなたのお名前は」と言うと、それも教えてくれます。結局、「いくら電話をかけてもらっても、無駄ですよ」ということをどうにか、お伝えして、それで電話を切ることができました。

その後で、インターネットで、その不動産会社の名前を検索したのですが、見事、「悪徳業者」らしき情報が出てきました。「違法な契約」で裁判沙汰にもなっているらしく、そういう情報まで出てきてしまいました。恐ろしいものです（後で、知人から聞いたのですが、こういう電話は長く喋るといけないようですね。話した内容はどうであれ、とにかく会話した時間によって、「A」とか「B」とかランク付けがされる場合があるそうです）。

▼最近またインターネットで調べてみたら、勧誘電話を録音したものを、あるサイトで見つけました。僕のところにかかってきた電話と、話し方、抑揚などがそっくりで、これは同一人物ではないか、と思うほどでした。ああいうのってパターンなんですね。少しでも相手の話を聞いてしまうと、電話を切ってもまたすぐにかかってくるんです。話だけでも聞いてく

ださいよ、と。家に
来ることをうっかり
OK してしまったら
もうアウトらしいで
す。居座られてしま
うとか。みなさんの
ところにかかってき
ても、ガチャ切りで
す。で、切るとすぐ
に折り返しかけてき
て、「何で切るんだ。
そっち行くぞ」と来
るので、電話線を抜
いたほうがいいみた
いです。僕からのア
ドバイスです（笑）。

3652はデビュー10周年のエッセイなので、 $365 \text{ 日} \times 10 \text{ 年} + \text{うるう年の} 2 \text{ 日} = 3672$
としたそう。